

## 井出理事十年掛りの労作

### Ⅱある「戦没者名簿が語るものⅡ

阿部敏勝（会員）

軍民合わせて三一〇万人の戦没者を出した十五年戦争（資料（一）終結から六十五年。多くの戦記が書かれ又映像化されて来ましたが、これらを大別すると、一九四九年（昭和二十四年）に刊行された戦没学生手記集「きけわだつみの声」に代表される「個人的心情」や「経験を中心にしたいわゆる「手記」と、これを文学的に昇華した「戦記文学」（資料（二））に分けられます。又戦記を単なる個人的経験や心情に留めず個人と国家や軍隊との相克として捉え、解析を試みているのが、いわゆる「戦史」であり、井出さんの労作はこの域に迫るものです。（太平洋戦争史、全六巻、天皇の軍隊・帝国陸海軍の全貌など―資料（三））

井出さんは一九二六年（大正十五年）長野県で生まれ、当地の旧制中学校及び大東亜練成院を卒業後南方軍に勤務された経歴の持ち主ですが十年まえから郷里に遺されていた「戦没者名簿」の整理に着手、二五一〇名の暦年、戦線、兵事（作戦、事件など）等々を分析の処。

（一）**敗退期戦没者比率八〇％**Ⅱ昭和十五年Ⅱ二〇年の郡内平均人口およそ八―九万人として、青壮年男子の役七―八％が戦没。特に戦線が拡大、激化した昭和十九年には八六三人、二〇年には八五〇人が戦没、一〇人中八人までが絶望的な戦局の犠牲者でした。

（二）**少年兵及び中年兵の増加**Ⅱ日露戦争当時「兵士」と言えば二〇才から二五才が中心でしたが太平洋戦争期には陸軍では十七才から四六才、海軍では十六才から四五才迄の方が戦没しています。そして戦争の悲劇は残された遺家族にもろに降り掛かっています。若者の戦没による家族、友人の悲しみは勿論ですが時には家計の断絶を招来しています。ましてや家族を抱えた中年兵（三十代、四十代）の苦悩は言うまでも有りません。「教育召集」の名で召集され、そのまま部隊（海軍では艦船及び陸戦隊）に送られ戦没した中年兵は太平洋戦争戦没者の二八、五％にも当ります。そしてこの対極に子供の様な少年兵（前記の通り、十六才の海軍少年兵）が戦没者の名簿に十名もありました。残酷な話です。

(三) **戦没地(戦線)の極大化** Ⅱ 兵站終末点を越えて軍を進めた統率の結果、制空、制海権、補給なく、兵は飢えと病に斃れてゆきました。満州に中国にビルマ・インド・雲南に、ニューギニア、ソロモン、ビスマルク、フィリッピン、ボルネオ、モルツカ、南洋群島、中部太平洋、小笠原諸島、沖縄、南西諸島、千島列島、南シナ海、台湾、東シナ海、本土近海に、印度支那、朝鮮、ソ連、外蒙、本土、こんな広い地域に狭い長野県南佐久郡出身者の「屍」が眠っているのです。恐ろしい事実です。

以上駆け足で井出さんのお仕事をご紹介して来ましたが、なにごとにせ全体一二五頁、統計数字、兵事分析等多数の労書だけに言い足りませんが最後に井出さんが強調しておられる「**戦争責任と戦後責任**」について触れさせて戴きたいと思えます。井出さんは「国家の名による武力行使、殺し合いには一件の意義も見出せない」兵は凶なりは古今東西の公理であり、兵を前提にすることなく、「交渉に徹し殺し合いや破壊に費やされる富を医療、教育、福祉、環境等に向けよ」その意味で「**日米安全保障条約**―**日米同盟**」は戦争の惨禍を知らない、或いはこれを他人事として無視する非道な同盟であり、「日本人の魂の独立」のためにも破棄すべきだと主張しておられます。戦争の実態を自ら体験し、自ら分析した「賢者の正論」だと思えます。

又井出さんが心配して居られた「個々の戦場体験の局所性、戦争技術の異常な発達と社会、年代の変化による「戦争体験の風化」に就きましては昨年三月に中央公論社から出版、話題となりました「**戦争体験の戦後史**」をご紹介します、この本は「戦争遺稿集」のパイオニアである「わだつみ会」を素材に「わだつみ会が何故反感を買ったのか」「六〇年安保と「戦争体験の距離」―「戦争体験への拒否感―戦中派の孤立」―「大学紛争の激化と「わだつみ像」の破壊」―「若年世代の大量脱会により戦争中派だけの集まりとなった第三次わだつみ会」―「渡辺清事務局長による天皇の責任追及」―「戦争体験の伝承の困難さ」等々についてユニークな示唆を与えてくれます。

(資料(四))是非ご併読下さい。

※筆者は本会理事

◆資料(一) 十五年戦争

昭和六年勃発の満州事変から昭和二十年の敗戦までの足掛け十五年間の戦火。

◆資料(二) A 個人的心情や経験による戦記(手記)

○きけわだつみの声一九四九年刊

(日本戦没学生の手記編集会)

○戦場体験「声」が語り継ぐ昭和(朝日新聞社二〇〇五年刊)

○戦争 「新聞記者が語り継ぐ戦争」

(読売新聞社一九七七年刊)

○父の戦記「週刊朝日偏」(朝日新聞社二〇〇八年刊)

○レイテ戦記 (大岡昇平著 一九六七年刊)

○松本清張への召集令状(森史朗著 二〇〇八年刊)

陸に上がった軍艦・三二才の二等水兵(新藤兼人映画シナリオ)

○戦争体験の労苦を語り継ぐ③

(平和記念事業団二〇〇七年刊)

○戦争を生きた先輩たち、いま後輩へ伝えたいこと

(中央大学・中央評論二六三号 二〇〇八年刊)

B 同多角的取材、構成による「戦争文学」

○人間の条件 (五味川純平著 一九五六年刊)

○滄海よ眠れ (沢地久枝著 一九八四年刊)

○特攻と遺族の戦後 (宮本雅史著 二〇〇八年刊)

◆資料(三) 個人と国家や軍隊との相克を解析

○太平洋戦争史 (歴史学研究会 一九五三年刊)

○銃後史ノート (J・A出版 一九七七年刊)

○ボクラ小国民 (辺境社 一九七四年刊)

○昭和の歴史、天皇の軍隊

帝国陸海軍の特質と全貌

(大江志乃夫著 一九八二年刊)

◆資料(四) 戦争体験の風化と伝承

○戦争体験の戦後史 (福門良明著 二〇〇九年刊)

(以上)